
立ち番

川崎ゆきお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
立ち番

【コード】
N2256M

【作者名】
川崎ゆきお

【あらすじ】
登下校の児童を見守るため毎日立ち番をしている木下老人が

「あれは不審者じゃね」

登下校の児童を見守るため毎日立ち番をしている木下老人が言う。

「もう少し詳しく話してもらえませんか？」

地元見守り隊の世話人は聞く。

「話していいのかどうか、少々考えておる。いろいろと配慮が必要じゃからな」

「情報は多いほうがいいので、ぜひお願いします」

「公にせんほうがいいと思うがな……」

木下老人は、そういうなり黙った。

「配慮ですか。分かります。では私にだけ、そつと教えてください」

「他の人間には言わんほうがよい」

「とりあえず、聞かせてください」

「黙っておこうと思っていたことだな。口にははいけないのではないかと思っただけ」

「はい、おっしゃってください」

「わしは二年ほど、あそこで立ち番しておる。学校が始まる時間と終わる時間にな。まあ、我が家の前じゃから手間もからん。子供の顔は全部覚えておる。子供もわしを知っておる。顔なじみじゃからな」

「毎日御苦労さんに思っています」

「さて、それでじゃ」

世話人は、時計を見た。

「で、不審者は？」

「あれを不審者と言うのかな。そう呼ぶべきではないかもしれんが、立ち番をやつとると、そう言ってしまうことになる」

「どんな奴ですか」

「わしは地元の人間じゃ。そのわしでも知らんとなると……」

「不審者は外部から来るので、当然かと」

「外と言えるかどうか……」

世話人はまた時計を見た。

「で、木下さんは何を見られたのですか？」

「子供じゃよ」

「子供？」

「列に加わっておる。もう何カ月にもなるのかな。あの子を見たことがない」

「あのう木下さん、ちょっと用事がありますので」

「そうか。これでいいのか」

「はい、きつと引越して来たお宅のお子さんかと」

「違うな」

木下老人はかっと目を見開いた。かなり怖い顔になる。

「他の子供たちも気づかんようじゃ。いつも独りでポツンと歩いておる」

「はあ？」

「あれは、この世の外から来ておる」

「急ぎの用事がありますので、これで」

翌日も木下老人はその子供を見た。そして、やはり話すべきではなかったと後悔した。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256m/>

立ち番

2011年10月2日23時15分発行